

伊丹公論1面 063001 藤1尚2井3奥4井



# 守りたい市バスのある風景

## 伊丹市交通局が創業70周年

伊丹市交通局は今年、創業70周年を迎えた。関西で公営バスを走らせるのは今や京都、神戸、高槻各市と本市だけ。伊丹市営バスは乗務員の接遇向上に努めるなか、乗客数も微増傾向にあり、伊丹市民の移動手段の一つとして親しまれている。

### 電気バス4台で営業開始

昭和24年(1949)2月、電気バス4台により当時の阪急伊丹駅から昆陽里、西野、荒牧、緑ヶ丘を経て同駅に戻る延長約16kmの1系統で営業を開始した。電気バスの運行は3年間だけで、ガソリン車併用時代を経て全車両がディーゼル車に移行した。

鉄道空白地帯が約8割と広い

伊丹の事情もあって路線が急速に充実。今では45系統、約79kmの路線網が張りめぐらされ、約300歩けば、どこかのバス停にはたどり着く計算だ。

この路線を93台のバスを使って毎日走り、年間延べ千45万2千人(平成29年度)を運んでいる。輸送人員は近年、微増傾向にある。

### 接遇向上に努力

経営危機に何度か見舞われ、昭和38年(1963)と昭和50年(1975)にはそれぞれ財政健全化計画をスタートさせた。

サービス向上策の一つとして全国的にも珍しい「善意の傘」が全車両に設置されたのは昭和59年。急な雨降りの時には便利で今も市民に重宝されている。また早くから車両の車いす対応に取り組み、プリペイドカードシステム(スルッとKANSAI)や、液晶式の次停留所名を表示する機器(OBC-VISION)なども導入した。特に力を入れているのは乗務員の接遇向上。外部講師を呼んだ接遇研修などを全乗務員が2カ年かけて受講する。

おもてなしの心と介助技術を運転席に座わる平松れいさん



文化勲章受章時の田辺聖子さん

## 田辺聖子・ことば蔵名誉館長逝去

### 追悼展示開催中〜メッセージ募集中

伊丹市名誉市民で伊丹大使でもあった田辺聖子・ことば蔵名誉館長が6月6日、亡くなった。91歳だった。ことば蔵

では、人生の機微を軽妙なタッチで描いた小説やエッセイで幅広い読者に愛された、この大作家の追悼展示を開催している。

田辺さんは大阪市生まれで昭和39年、「感傷旅行(センチメンタルジャーニー)」で芥川賞を受賞。昭和48年から伊丹市に在住。平成7年には紫綬褒章を、平成20年には文化勲章を受賞するなど、日本文学界で輝かしい

功績を残した。伊丹市では多忙な執筆活動のかたわら、昭和58年の伊丹市情報誌「あんぐる」創刊号で、アウンサーの道上洋三さんや、夫で「カモカのおっちゃん」と故川野純夫さん、伊丹市長との座談会に参加。その中で田辺さんは「伊丹はせっかくながら、霧田さんも人情もええとこなんやから。もともと古いまちで文化の伝統もあるのやし。私は伊丹を文化都市にしてほしいと思うわ」と話されていた。

この後も、同誌には平成6年3月の最終号まで毎号エッセイを連載し、戦時中に過ごした伊丹の思い出や百人一首にも詠まれた猪名野笹原の歌を楽しくわたりやすい「ことば」で解説いただいた。田辺さんの伊丹への想いが伝わる貴重な資料となっている。同誌はことば蔵で閲覧できる。

平成24年7月の「ことば蔵」オープニングイベントに田辺さんは名誉館長として出席。開館に花を添えていただいた。

「市バスのある風景」を守る 増田平・交通事業管理者

「市バスのある風景」を守る。ただ、「遅れて到着した理由のアナウンスがほしかった」など、改善余地があるのも事実だ。

「市バスのある風景」を守る (編集者一回)

「(61)は「市バスはこれまで70年、市民から愛され続け、今では市内を走る市バスの姿が伊丹の風景になっている。誰もが快適に、そして安全に利用できる環境づくりを常に意識し、この風景がずっと続くことを願いたい」と話している。

### 女性ドライバーが活躍

バスの運転手は全員男性という時代が長く続いたが、平成11年(1999)に初めて女性ドライバーが誕生。現在は5人が活躍している。関西の4公営バスの中で女性ドライバーの比率が2%を超えているのは、伊丹市だけだ。

### 市バスモニターも評価

市交通局は、市バスモニターを積極的にやっているが、これらの取り組みが功を奏し、平成27年から平成28年の調査結果では、接遇や安全性に関する評価が改善している。

特に、乗車時のあいさつと安全運転については、「お待たせ

## 文字大きくしカラー化 発行回数3回に

### 今年度から本紙

本紙は今年度から、より読みやすい紙面にするために基本文字を大きくし、1行あたりの文字数を16文字から14文字とします。また、1面と4面をカラー化します。

発行回数をこれまでの年4回から3回(6月、10月、2月)とします。記事の厳選とコンパクト化を進め情報量の減少を補いながら、今後も見やすく読みやすい紙面づくりを心がけてまいります。

(編集者一回)

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉(筆名「丹城」)が、昭和11年(1936)1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。